

(PDF版・3の21) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」 (115-231頁)

「一 神の用意」

区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」（「神の本質の問題」）を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」（「神の存在の問題」）を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「われわれは、すでに、直接的に神ご自身を啓示されたのではなく〔換言すれば、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」ご自身を啓示されたのではなく〕、換言すればご自身の中で存在し給う神そのもの〔すなわち、「自己自身である神」（「ご自身の中での神」）としての「三位一体の神」そのもの〕を指し示しているような聖書の証言の要素は存在しないということを見た。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神が、〔ご自身の中での〕神としてご自身の中で存在し給うというそのことはもちろん〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な存在の仕方における〕神の啓示を支えている力である」が、しかし、「聖書の証言は、あくまで〔イエス・キリストにおける神の自己〕啓示の中での神〔すなわち、「第一の問題」である「神の存在の問題」に関わるところの、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為、行動、外在的本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〈全体〉）における神〕を指し示しているのであり、ただそのようにして……ご自身の中で存在し給う神〔「第二の問題」である「神の本質の問題」に関わるところの、「自己自身である神」としての「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」〕を指し示している」。すなわち、第二の形態の神の言葉である「聖書の証言」は、「あくまでも神の啓示について証しする」という「ただそのようにしてだけ、神ご自身について証しする」、また「聖書の証言は、……啓示を通り過ぎて〔啓示を後景へ退けて、啓示とは独立的に〕〈宇宙の中での人間〉を指し示さない」、「聖書の証言」は先ず以て先行する「神の用意」を指し示す。したがって、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神として神の特別啓示、啓示の真理を後景へ退けた、その特別啓示、啓示の真理から独立した「宇

宙の中での人間が、傍系的な線〔換言すれば、「副次的な言明」、「『自然』神学」的な言明〕において問題である」。何故ならば、「聖書的証言」によれば、「宇宙の中での人間」は、先行する「神の用意」に対して「その後が続いて」後続して行くべき人間であるからである（そこでは、先行する「神の用意」に対して「その後が続いて」後続して行くべき「人間の用意」が問題となる）。「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」、「神の業の<衣>、<殻>、<特定ノ外形>」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「その最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の实在」としての第二の形態の神の言葉（「最初の直接的な第一の啓示の<しるし>」）である「聖書的な証言」は、類的機能を持つ自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間の観念的生産物としての人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」についての証言ではなく、それ故に「人間的な思想の形においてであるが、すべての人間的な思想を超えた」ところの、「イエス・キリストの中で神が人間と出会い給う出会いの出来事についての証言である」、すなわち聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の特別啓示としての「神の啓示についての証言である」。したがって、「もしも聖書的証人たちが、その啓示の中での神の主権的な恵みと並んでなおまた、宇宙の中での人間が独立した形で神と結ばれていることについて教える自由を持つとするならば」、「その時、まさに彼らはそのことでもって、自ら啓示の証人であることを<否定する>ことになるのである」、また「その時、彼らは、啓示と関わるにも拘らず、あたかも<人間の体系的な原理と関わっている>かのように関わっているということになるのである」、またその時「彼らは、……〔包括的に言えば、そのような「『自然』神学」の<段階>で停滞し思惟し語っている〕自分の正体を暴露する」ことになるのである、それ故に「その時、それとしての聖書的な『主要な言明』〔「主要な線」、「『<非>自然』神学」的な言明〕そのものが、……虚言となってしまう」。第二の形態の神の言葉である「預言者と使徒たちは、人間として、人間の〔類的機能を持つ自由な人間の自己意識・理性・思惟の〕偉大さと〔誤解し誤謬し曲解するという〕不幸とに、ほかの人間の場合と同じようにあずかっているものであり、決して人間の偉大さ不幸から例外的に免れていたわけではないとしても、彼らの証言は、彼らおよびすべての人間と共に人間の偉大さと不幸にあずかっている対象〔あの人間的な自然としてある人間の観念的生産物、人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」〕を証ししているのではなく」、第二の形態の神の言葉である「自分の証しの対象〔すなわち、「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」の対象〕、自分の証しの起源である」ところの、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身——すなわち、「自分自身と矛盾しないし、また彼らに対しても彼らがそれについて語らなければならないことの中での自分と矛

盾することを許さない対象を証しているのである」。したがって、第三の形態の神の言葉である教会のすべての成員としての全く人間的な「われわれの側としても、〔Iコリント3・10-11、エフェソ2・14以下からして〕、そのような対象〔すなわち、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身〕の証人としての〔第二の形態の神の言葉である〕彼らが語ることを聞きたいと願うならば、……彼らはまさに一つのことを語ったということ、ただ一つのことだけを語ることができたし、語ろうとしたということを、換言すれば承認された聖書的な『主要な言明』〔「主要な線」、『＜非＞自然』な神学』的言明〕の内容を形造っていることを語ることができたし、語ろうと欲したということを堅くとって離してはならないのである」。このような訳で、すでに述べてきた「聖書的なあの副次的な言明は〔「傍系的な線」、「『自然』神学』的言明は〕、それとして、またそれらの言明によって提示されている問題は、そのまま看過されたり抑圧されてしまうことはできないとしても、……その副次的な言明は〔「傍系的な線」、「『自然』神学』的言明は〕、『主要な言明』〔「主要な線」、『＜非＞自然』な神学』的言明〕を＜否定せず＞、それどころかただ『主要な言明』を＜強調＞し＜確認＞するだけであろうということ以外のことははじめから期待することはできない……」。「その時、そのことは、……自然神学への招きと要請は、換言すれば自然神学を基礎づけ・可能にし・正当化するであろう聖書的な教えは、あの副次的な言明〔「傍系的な線」、「『自然』神学』的言明〕の中だけでも存在しているということはあり得ないということの意味する……」。このような訳で、われわれは、これまでの「考察と探究をもって」、「聖書的啓示証言においては」、「副次的な言明」は、「内容的に見ても形式的に見ても、『主要な線』の言明〔「主要な言明」、「『＜非＞自然』な神学』的言明〕と袂を分かつことは決してないということについて教えられたと言ってよい」、換言すれば両者を二元論的に分離し対立させ木を見て森を見ないという仕方で行而上学に「副次的な言明」を拡大鏡にかけて全体化し、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別啓示、啓示の真理から独立させたところにおいてではなく、区別を包括した単一性において「副次的な言明」はあくまでも「主要な言明」に包括されているということについて教えられた。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の特別「啓示からして、この傍系的な線の上で、啓示の故に、啓示に適った仕方で〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」(『教会教義学 神の言葉』)の＜総体的構造＞(『知解を求める信仰 アンセルムスの神の存在の証明』)に基づいて)、啓示が示されるのである」。

「われわれは、宇宙の中での人間に関するそのような事情を、最後に、先ずエゼキエル一・四一―二八、一〇・八一―一七、一一・二二で現われており、それから黙示録四章で特有な仕方で繰り返されている人と獅子と牝牛と鷲の顔を持った四つの生き物の

幻に照らして明らかにする」。「それらの生き物は、天使、人間および動物の間にある不思議な中間的存在という形で描かれつつ、個々の点においてはおそらく四つの方角、四季ないし十二宮を表徴的に表しながら、エゼキエル書においても黙示録においても、疑いもなくそのすべての動揺した姿にも拘らず、おのおの顔の向かうところにまっすぐに進んだ（エゼキエル一・九）配列された神的<創造>そのもの<と>、さらにそれとエゼキエル書においては顕著な仕方で描かれた四つの輪の形の中で描き出された<世界の動き>が区別されており、しかし同時にそれと並列的に関係づけられている神的<創造>……を代表している」。「何故ならば、『生き物がいく時には、輪もその傍らに生き、生き物が地から上がる時には、輪もあがる、霊の行く所には彼らも行き、輪は彼らに伴って上がる、生き物の霊が輪の中にあるからである』、『彼らが行く時は、これらも行き、彼らがとどまる時は、これらもとどまり、彼らが地からあがる時は、輪もまたこれらと共にあがる、生き物の霊が輪の中にあるからである』（一・一九―二一、一〇・一六―一七）」——「ソレ故ワレワレヲヒドク苦シメル問題ガワレワレヲ失望ニ追イヤル時ガ来ルカモ知レナイガ、ソノ時ワレワレハコノ言葉ヲ思イ出ソウ、生き物ノ霊ガ輪ノ中ニアル、ト。確カニ、ワレワレハ、危険ナ、不可解ナ事柄ニオイテ繰リ返シ動揺スル時、コノ教理ノ中デ安ンズル以外ニ何ヲナスコトガデキョウカ（カルヴァン）」。「それらの生き物の霊が、輪〔「世界の動き」〕を支配しているという事実は、〔「神の創造のみ業」としての〕それらの生き物自身は、それらの翼が動いていようと休んでいようと輝ける大空（あるいは敷石）のもとに立っており、そこには『サファイヤのような位の形があり、またその位の形の上に、人の姿のような形があった……彼のまわりに輝きがあり、そのまわりにある輝くのさまは、雨の日に雲に起こるにじのようであり、主の栄光のさまは、このようであった』（一・二六―二八）という理由で、慰めに満ちたものである」。「それらすべては、世界と世界の動きの<直接的な>見方としてではなく、むしろ形式および内容から見て、〔第二の形態の神の言葉である〕預言者的なく幻影を見ること>、そのようなものとして、〔第二の形態の神の言葉である〕預言者的使信のそのほかの対象と切り離すことのできない預言者的なく幻影を見ること>の対象として示されるということの上に力点を置くことは、ゆるされる」のではないであろうか、「あるいはまさに命じられている」のではないであろうか、「さらに、高いところにいますあの形からして、生き物は、彼らの霊、それから輪の中で働く彼らの霊を持っている、というように受け取ることはゆるされる」のではないであろうか、「あるいはまさに命じられている」のではないであろうか、「さらにまた、雨の日に起こるにじと比較されるべき形の輝きということで、……そこではまさに雨の日に起こる<にじ>が神とすべての生き物の間の契約、それからシナイにおける契約とゴルゴタの契約の前提となるノアの契約の<しるし>として記されている創世九・一二以下を考えることはゆるされる」のではないであろうか、「あるいはまさに命じられている」のではないであろうか、「最後に、この疑いもなく神ご

自身の代理をつとめる人の姿のような形ということで、カルヴァンと共に、肉ノ中デ現ワサレタ神性全体を、換言すれば「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの〈名〉」）——この「イエス・キリストを理解することはゆるされる」のではないであろうか、「あるいはまさに命じられている」のではないであろうか。

「新約聖書の平行記事である黙示録四章では、顕著なことにエゼキエル書のテキストのこの構成要素がはっきりと口に出して述べられていくない」。また、四つの生き物の傍らにある四つの輪についても語られていない。その代わり、黙示録四章においては、〈幻〉は、別な観点ではもっと明瞭である。門が天にあり、〈幻〉を見る者はその門が開けられているのを見る。彼は、『ここに上がってきなさい』と招かれる。そこで、声がこう叫ぶ、『これから後に起こることを、見せてあげよう』（一節）。そのことでもって、さらにはっきりと、今述べられた〈幻〉を見ることの終末論的な性格が強調される。「それから、神の栄光の御座のまわりに設けられた特定の秩序の内部に、またこの秩序の内部で全く特定の機能を果たしつつ、四つの生き物が現われる。それらの生き物は、先ず最も内側の円として、またここでも〈にじ〉によってめぐりかこまれている（三節）あの御座に相対して立っている。その場合、四つの生き物は、御座から（エゼキエル書における大空の代りに現れているように見える）ガラスの海によって隔てられている。四つの生き物は、それから、一方で、自分たちも第二の円によって燃える松たいまつとして表示されている神の七つの霊（黙示録の中で、そのほかの新約聖書の中で聖霊に帰せられている意味を持っているところの霊）によって、めぐりかこまれている。他方で、それらの霊のまわりをめぐって第三の最も外側の円として、二四の座には二四人の黄金の冠をかぶった明らかに教会の天的な代表である長老たちが位置を占めている。「その四つの生き物が果たす機能に関して、彼らは、『昼も夜も、絶え間なく、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能にして主なる神、昔〈いまし〉、今〈いまし〉、やがてくきたるべき〉者、と叫び続けた』（八節）ということのをわれわれが聞く時、この霊の仲立ちをする役割のことが考えられなければならない。「人は、イザヤ書六・三に出てくる、『聖なるかな』の三位一体的な〔すなわち、「聖なるかな」の、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」としての三位一体的な〕、同時にまた救いの経綸的な変化した形に〔すなわち、「われわれの神」としてその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・業・働き・行為・行動）、外在的本質、すな

わち父、子、聖なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事<全体>、詳しく言えば起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——「啓示者」・言葉の語り手・創造者、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——「啓示」・語り手の言葉（起源的な第一の形態の神の言葉）・和解者、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事<全体>に]、注意しなければならない。ここで、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）は、客観的な「存在的なく必然性>」と主観的な「認識的なく必然性>」を前提条件としたところの主観的な「認識的なくラチオ性>」を包括した客観的な「存在的なくラチオ性>」としての三位一体の唯一の啓示の類比としての神の第二の存在の仕方における神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、それ故に「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な實在」）の関係と構造（秩序性）のことである。「すなわち、神が待望と現在と想起の三つの時間の中で〔すなわち、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事<全体>の中で〕神であり給うということは、ここでは、まさに神によって造られたものが語る言葉の中で、全能の神の本来的な賓辞として現れているまさに神によって造られたものこそが、ほかならぬこの神を知り、また宣べ伝える。まさにこの神への讚美に対する応答として、それから第三の最も外側の円のところで二四人の長老が、彼らの座からおり、ひれ伏し、彼らの冠を御座の前に投げ出して、自分たちの側でも創造主をたたえる讚美を歌いはじめる、『われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られました。御旨によって万物は存在し、また造られたのであります』（黙示録九一一））。この「讚美の歌声」は、「あの絶え間なくなされる造られたものが捧げる讚美の歌声と違って、明らかに一回的な、いわば歴史的な出来事である。「まさにここで問題である事柄においてこそ、黙示録四章とエゼキエル一章および一〇章は完全に一致する」。「エゼキエル書において四つの生き物は、神の栄光によってめぐりかこまれた<人>の御座の担い手であるが、そのように黙示録においては、<三位一体の>神の讚美を歌う（「自己自身である神」としての「三位相互<内在性>」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神は、ここでも、明らかに御座を占める方である」）。<それに基づいて>、それから、この方三位一体の神は〔すなわち、「自己自身である神」としての「三位相互<内在性>」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」は〕、〔第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支

配者・標準とした第三の形態の神の言葉である] **教会によって** [「自己自身である神」としての「三位相互<内在性>」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする] 三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われぬ差異性」の中での三度別様な起源的な第一の存在の仕方（父なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）における] **創造主としてほめたたえられ給う**。このような訳で、「二つの<幻>は、両方共、次の事実を明らかにしている」——すなわち、第二の形態の神の言葉である「**聖書は、それが宇宙の中での人間の証言をその本来的な証言** [すなわち、聖書的な「主要な言明」、「主要な線」、「『<非>自然』な神学」的言明] **の中で取り上げる時でも、……その本来的な証言を破壊したり、ほかの証言** [すなわち、類的機能を持つ人間の自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」証言] **をもってきて置きかえたりせず、** [類的機能を持った人間の自由な自己意識・理性・思惟を駆使してなされる] **宇宙の中での人間についての証言を** [すなわち、「聖書的な「副次的な言明」、「傍系的な線」、「『自然』神学」的な言明を)、**聖書の本来的な証言の中に編み入れ、それ故に実際的にその時でも、** [聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の特別] **啓示からして** [すなわち、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身からして]、**啓示の故に、啓示に適った仕方で** [すなわち、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて]、**啓示そのものを指し示しているという事実を明らかにしている**」（Iコリント3・10-11、エフェソ2・14以下）。このことからして、第二の形態の神の言葉である「**聖書は、** [起源的な第一の形態の神の言葉である] **神の啓示の中で・神の啓示と共に与えられたのではないところの、神の啓示に拘束されていないところの** [神の啓示から独立したところの]、 [第二の形態の神の言葉である] **預言者と使徒たちの神の認識可能性を考慮に入れなければならない必然性の前にも、またそのような認識可能性を考慮に入れ得る可能性の前にも、** [第三の形態の神の言葉に属する教会における全く人間的な] **われわれを置かないということ**を、われわれは確かめたことになる。聖書からして、われわれは、……神の言葉と霊の恵みの中での神の用意とは違うところの [すなわち、「言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である」ことからして、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」（客観的な「存在的な<必然性>」）<と>その「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」・「キリストの霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（主観的な「認識的な<必然性>」）の中での「神の用意」とは違うところの]、人間のための神の用意を探し求めるよう要求されていないし、また探し求めてよい権利も与えられていな

い、「まさに聖書からして、われわれは、まさしく〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」という〕神の啓示の恵みの中でわれわれに贈り与えられている〔信仰の認識としての神認識、啓示認識（啓示信仰）、人間的主観に実現された神の恵みの出来事としての〕神の認識可能性以外の神の認識可能性を問わないよとの命令を聞いたのである。それと共に、結局、われわれを内容的に同じ結論に導いたわれわれの前になされた考察は、聖書に適った考察として確認されたことになる」。第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としたところの、「それ以前に語られた神ご自身の言葉……と自分を関わらせている……時、正しい内容を持っているということであり、われわれ以前の人々によってなされた教義学的作業の成果は、根本的には……真理が来るということのしるしである」（『教会教義学 神の言葉』）。

（４）「われわれには、最後に、……〔先行する「神の用意」に対する後続する「人間の用意」という〕別の第四の答えが可能であり、負担力あるものとして示されるかどうかを問うて行くことが残っている」。第三の形態の神の言葉である全く人間的なく教会＞史における「『自然』神学」の生命力はあまりにも真剣な問いであり、実際的にみてもあまりに重要なものである」ので、「『自然』神学」を＜否定的に＞判断しなければならず、それ故に「『自然』神学」を＜放棄しなければならない＞理由を知ること……（中略）すまずことはできない。「あの＜否定的な＞判断を下し、それに対応する決断を服従の中でなして行くことができるとするならば、人は、その際なすところのこと、またなさないでいることが何であるかを、よく知らなければならないのである〔そのことをよく認識し自覚していなければならないのである〕」。例えば、「カール・バルト——その生涯と神学を＜トータルに＞把握するための＜研究＞」（その２）の「2. 成熟の書としての『福音と律法』への道程」の「福音主義教会がその信仰告白という形で『自然』神学の問題と＜対決＞した出来事の＜初めて＞の記録である」バルメン宣言に関する「1934年」の箇所全体を参照されたし。「そうでないとしたら、服従は、正しい服従ではないであろう」し、「そうでないとしたら、われわれは、実際は、『自然』神学と手を切っていないであろうし、また『自然』神学と手を切ることが何を意味しているかさえ知らないことになるであろう」。

われわれは、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての「神の認識可能性を、〔先行する〕ただ神ご自身の用意〔イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞〕の中でだけ見出すことができ、〔先行する〕ただ神の啓示の自由な恵みとあわれみからしてわれわれにとって近づき得るものとされた近づき得ないものとして感謝をもって〔後続して〕受け取ることができるだけであり、それ故にそのほかの神の認識



可能性を期待するようなすべての神学は、〔聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規  
準・法廷・審判者・支配者・標準とする第三の形態の神の言葉である〕教会の地盤の上  
では、〔イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己  
証明能力」の〈総体的構造〉からして、聖書の中で証しされている「キリスト教的神概  
念」からして、〕議論の余地なく……不可能であるという……単純で自明的な認識はほ  
かにないという主張から出発した。「これとは〈別な〉〔聖書の中で証しされているキ  
リストにあっての神としての〕神の認識可能性を期待する神学〔すなわち、包括的に言  
えば『自然』神学〕は、すでに最古の〔第二の形態の神の言葉である〕使徒〈後〉の  
〔第三の形態の神の言葉である〕教会（殉教者たちの教会）において、異教主義との文  
書をもっての戦いに際して表向き欠かすことのできない道具として、キリスト教神学の  
自明的な古代模倣的な、支柱となった。「そのような『自然』神学は、アウグスティ  
ヌスのような者に対しても、その救拯論的な恵みの原理のまことに首尾一貫した展開  
にも拘わらず、プラトンの神理念の形で〔人間学的な、哲学的な神理念の形で、換言す  
れば類的機能を持つ人間の自由な自己意識・理性・思惟を駆使して対象化され客体化さ  
れた人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」理  
念の形で〕、彼の教會的——キリスト教的思惟〔混合神学、人間学的神学〕の学問的な  
基礎として、自分を推薦することができた」。そのような『自然』神学は、教会が時  
代と現実**に強いられた**ところでしか現存することができ得ない限り、「コンスタンティ  
ヌスによって導入された教会と国家という外的な新秩序と関連なしにではなく」、また  
そのような『自然』神学から対象的になって距離を取り得ていなかったところで、  
「〔人間学者、哲学者の〕アリストテレスの再発見の後の、中世の神学に対して……結  
局最後には〔第三の形態の神の言葉であるローマ・カトリック教会の全く人間的な〕ヴ  
ァチカン公会議で、〔混合神学者、人間学的神学者、哲学的神学者の〕トマス・アキ  
ナスの最高業績を標準化し教義化しつつ決定された公式の文書の中で明らかとなった  
力を手に入れることができた」。そのような『自然』神学は、「宗教改革者」のその  
ような神学に対する〈否定的な〉観点から、「その概念の救拯論的な内容的な面におい  
ては、神の自由な恵みに対するアウグスティヌスを立場を凌ぐ告白にまで高められ、  
「積極的な面においては、聖書原理を再建しつつ確かにイエス・キリストにあっての神  
の啓示の単一性を新しく告白される」ところまで辿り着いたのであるが、「しかし、残  
念ながら否定的な面において、〔宗教改革者たちは、〕明確さをもって別な啓示と別な神  
認識を問う問いを原則的に除去することができず〔すなわち、包括的に言えば、『自然』  
神学〕を問う問いを原則的に除去することができず、それ故にこの点で不確実さとま  
た否定すべくもない事実的な首尾一貫性の欠如が〔すなわち、『自然』神学性が〕す  
でに宗教改革者たち自身のところで可能であったような仕方で〔すなわち、すでに宗教改  
革者たち自身の立場が『自然』神学を温存させ可能とさせているという仕方で〕、自分  
〔の『自然』神学性〕を隠し続けることができた」。そのような『自然』神学は、「宗

教改革者と同時代に、いわゆる決定的には古代末期のストア派の再発見から成り立っていた人文主義者の中で、……すでに一六世紀の教会内外の熱狂主義者たちの教えの中で直ちに姿を現わした全く新しい形と突破口を手に入れることができた。(中略) そのような『自然』神学は、〔人間中心主義を惹き起こした〕一八世紀において、ひそかにすでにとっくの昔行っていた支配を全くおおっぴらに行うことができた。……世界観的な革命と関連しつつ、近代の学問的な意識の前でも、一般大衆の意識の前でも、まさに本来的な根本教義、どんな嵐の中でも何の疑念もなく主張されることのできるキリスト教の中心的教説であるという〈外観〉を持つことができた。そして、今日まで、福音主義神学の内部でも……〔そのような『自然』神学』を、自らの立場において、根本的包括的に原理的に止揚し克服して行くという〕刷新の試みは一つもなかった」。このような訳で、「疑いもなく、そのような考え方は、貧弱で、退屈な、最終的には実を結ばない、偽りの取り組み方でしかないものではある」が、「人は、〔第三の形態の神の言葉に属する全く人間的な教会における〕キリスト教神学とそもそも教会の歴史を、〔『自然』神学〕の〈段階〉で停滞し思惟し語る〕理性と啓示の・哲学と神学の関係の唯一の歴史として、換言すればまさに『キリスト教的』自然神学の唯一の歴史として記述している者たちは、結局は正しいのではないかと問わなければならない」ことになってしまう。

「人が、キリスト教的自然神学を弁護するために、〔第三の形態の神の言葉である全く人間的な〕教会ノ意見ノ一致を、換言すれば一方で多かれ少なかれ濃密な仕方で〈常にいたるところ〉明らかにこの現象が現れていた事実を引合いに出し、他方でこの現象に対し根本的に戦いを挑もとすることは前代未聞の新しいことだとして常に猜疑の眼をもって見る……そのことは、〔キリスト教的自然神学を弁護する立場からしては〕全く正しいことだと言える〔至極当然なことだと言える〕」としても、「ただし、そこでは〈どういう〉〔第三の形態の神言葉である〕教会ノ意見ノ一致が問題であるかが問われなければならないのである。まさにこのことが、今から問われなければならない」。言い換えれば、次には、われわれは、先行する「神の用意」、すなわちイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた「人間の用意」、その先行する「神の用意」に対して「その後について」後続して行く「人間の用意」、具体的には三位一体の唯一の啓示の類比としての神の第二の存在の仕方における神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な實在」)の関係と構造(秩序性)に連帯し連続し、その秩序性における「その最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の實在」

としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」＜教会＞教義学の問題、＜福音主義的な＞教義学の問題）＜と＞そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（区別を包括した単一性において、＜教会＞教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、すなわち全世界としての教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指して行くという「人間の用意」の問題を明確に提起することが問われなければならない（I コリント 3・10-11、エフェソ 2・14 以下）。